

い方をしているという考え方につながる危険がある。

これは、反対の性質の単語を集めるにしても同じことが言える。こうした、ことばあつめに関しては、用例をも含めてあつめ、実際の文脈の中の微妙な差異、使われかたのちがいを確認すべきではなからうか。

とにかく、語いの拡大を意図的にはかっていくためには、もっと工夫が必要であり、その工夫は意味・用法に関してなされなければならないと思う。つまり、語いの量的拡大もさることながら、語いの意味的拡大を重要視すべきだというのである。

#### 4. 語いの意味的拡大

ある日、三人は、大きな町に つきました。町の中を歩いて行くと、ある家の戸口で、むすめがひとり、しゃがんで いません。三人が、わけを たずねると、「わたしは、今夜、ばけものに 食べころされて しまうのです。」と いました。その家の 人たちも いません。話を 聞いた 三人は、ばけものたいじをする ことに しました。(「ちからたろう」  
—東書 2下 P.97~P.98—

この文章の中には、二つの「家」があるが、それぞれちがった意味をもっている。前者は建物としての「家」であり、後者は家庭というようなかなり抽象的な意味をもち「家の人」というつながりの中でひとつの概念をあらわしているというべきであろう。

あ、ねこが いる。かわいい こねこだね。うち  
の こねこよ。たまというなまえよ。いぬが きた。わあ おおきな いぬだ。あら、たいへん、たいへん。たまが、あんな ところに いる。たま、たま、おりて おいで。はやく おりて おいで。りこうな こねこだな。さあ、うちへ かえらうね。(「こねこ」  
—光村 1上 P.10~P.15—

この場合も、前者の「うち」は飼育主体、後者の「うち」は住居をさすというように意味のちがいがある。

このように、すでに知っている単語であってもよく考察してみると、その意味の幅は非常に大きい。したがって、その単語は知っていても、どんな意味を表すために使われたかわからない場合がある。たとえば、

金持ちと金の少ない人とのちがいは、いつも相場の高いところと安いところにある。途中では似たりよったりである。そうするとどうなるか。金持ちは高いところは買いを見送る。当然資金にゆとりをのこしてある。それは気もちのゆとりでもあるので、あとからくる突っ込みを勇ましく拾うことができる。

の下線の単語は、どんな意味に使われているか見当がつかないであろう。相場などにくわしい人や専門家ならば前者は株の相場が急に大きくなることで、後者は株を買うことだ、とわかるであろうが、一般の人にとってはわからないにちがいない。つまり、多くの人が、この単語にもっている意味概念の中には含まれていない意味として使われているということである。

語い力とは「使用語いの力」であり「理解語いの力」であった。その点でも、語いの意味を広げる指導を語い指導のひとつとして、もっと重く見ていいのではないだろうか。とくに、日常使われてよく知られている単語についてその意味を広げていくような配慮は、もっとなされるべきだと思う。

#### 5. 一教材の中で単語の意味を広げるための単語のとり出し方

一教材の文章の中に同じ単語がさまざまな意味で使われていれば、語いの意味の拡大を指導するには、たいへん都合がよい。4であげた「ちからたろう」や「こねこ」の場合がそれである。

次に教材をあげて、いくつかの単語をとり出してみることにする。

<sup>1</sup>越後(今の新潟県)に住むある男が、江戸(今の東京)へ行行って働こうと思って<sup>2</sup>村を出た。秋の<sup>3</sup>くれであった。

— 略 —

大きな山々の間をぬって<sup>4</sup>通る高いとうげである。男はせせと足を速めたが、とうげの中ほどで、日はとっぷりと<sup>5</sup>くれてしまった。

— 略 —

男は、すっかりとほうに<sup>6</sup>くれてしまった。

— 略 —

やれ、うれしやと、男は、明かりを目当てに歩き<sup>7</sup>だした。やぶをかき分けたり、岩につまずいたりしながら、やっとたどり着いてみると、そこには、りっぱな<sup>8</sup>家が建っていた。

— 略 —

「旅のとちゆう、日が<sup>9</sup>くれてこまっている者です。一夜の宿をお願いできないものでしょうか。」

— 略 —

<sup>10</sup>通して<sup>11</sup>くれたへやは、りっぱなざしきだった。ばんご飯にと<sup>12</sup>出して<sup>13</sup>くれたごちそうも、山の中ではめずらしいものばかりだった。女の人は、親切にもてなして<sup>14</sup>くれた。

— 略 —

「はい。江戸へ出て、<sup>15</sup>働こうと思います。」

「お<sup>16</sup>働きになるなら、わたしの所でいかがです